

増田哲夫

JA 尾道総合病院内科

北口聡一, 風呂中修, 益田 健

JA 尾道総合病院病理研究検査科

米原修治

症例は50歳代女性。2006年10月血痰のため近医受診し、胸部Xpで肺野異常陰影を指摘され、確定診断が得られず、肺癌疑い(cT2N0M0 c-stage IB)で手術的に12月に入院し、左下葉切除術、縦隔リンパ節郭清を施行した。病理組織学的検査でpleomorphic carcinoma pT2N2M0 p-stage IIIAと診断された。術後合併症なく、術後16日目に軽快退院した。補助化学療法目的で平成19年1月入院時に多発肺転移、両側腎転移、多発骨転移、脳転移など全身転移を認めた。頭蓋内圧亢進症状があり頭蓋骨転移に対して放射線照射した。分子標的治療を行ったが効果なく2007年3月原病死となった。術後早期に再発をきたし原病死したpleomorphic carcinomaの1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

79. 腰髄液腔・腹腔短絡術(LPシャント)とゲフィチニブ投与が著効した癌性髄膜炎

岡山大学病院呼吸器内科

久保寿夫, 瀧川奈義夫, 木浦勝行

梅村茂樹, 高田三郎, 堀田勝幸

田端雅弘, 谷本光音

岡山大学病院呼吸器外科

豊岡伸一, 伊達洋至

症例は非喫煙者の51歳女性。2006年5月より、構音障害と左顔面神経麻痺を認めた。前医にて、多発性脳転移を伴う肺腺癌と診断され、10月よりゲフィチニブが開始された。原発巣と脳転移病変は縮小していたが、水頭症による意識レベルの低下を認め、11月に当科へ紹介された。髄液細胞診でclass Vが確認され、メソトレキセートの脳室内投与およびゲフィチニブ内服とLPシャント術を施行した。髄液は一日約500ml排出されていたが腹水貯留も認められず、全身症状も著明に改善した。髄液からenriched PCR法によりEGFR変異(exon 19欠失)が認められた。髄腔には移行し難いゲフィチニブが、LPシャントにより腹腔内に移動

した癌細胞に効果を示したと考えられた。

80. 当院における Gefitinib 投与症例の臨床的検討

東広島医療センター呼吸器科

長尾之靖, 香河和義, 村上 功

重藤えり子

東広島医療センター呼吸器外科

柴田 諭

【目的】当院において Gefitinib を投与された進行非小細胞肺癌患者における臨床効果を検討した。【方法】2002年9月から2007年4月までに当院で Gefitinib を投与された73例について抗腫瘍効果と患者背景を解析した。【結果】患者背景は年齢中央値67歳、男性40名、女性33名、PS 1:2:3:4=23:17:28:5、組織型 腺癌:扁平上皮癌:その他=62:6:5、病期 IIIA:IIIB:IV=4:15:54であった。治療効果は PR:NC:PD=16:21:36で、奏効率は21%、全生存期間の中央値は307日であった。【結論】奏効率は従来報告よりも低く、PS不良例、病期進行例を多く含むと考えられた。

81. 進行肺腺癌無治療例における EGFR 遺伝子変異の臨床的意義の検討

東広島医療センター呼吸器科

村上 功, 香河和義, 長尾之靖

重藤えり子

東広島医療センター呼吸器外科

柴田 諭

【目的】自然経過に近い症例を検討することにより、EGFR 遺伝子変異の臨床的意義の検討を試みた。【対象ならびに方法】当院で緩和ケアのみを受けた進行肺腺癌症例64例の診断時に得られた細胞診陽性材料(擦過細胞診38検体、胸水26検体)からDNAを抽出して、EGFR 遺伝子の Exon19ならびに21領域の変異をPCR-DGGE法(変性剤濃度勾配ゲル電気泳動法)で解析し、変異の有無と予後との関連を検討した。【結果ならびに考察】EGFR 遺伝子変異は16例(25%)に検出され、変異の有無で予後に有意な差を認めなかった(生存期間中央値:変異陽性例15週/陰性例12週)。進行肺腺癌の自然経過においては、EGFR 遺伝子変異

は予後に影響しないのではないかと考えられた。

82. 高齢者肺腺癌に対する初回治療としてのゲフィチニブの第II相試験(WJTOG 0402-DI)

広島市立広島市民病院呼吸器科

満田一博

大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター肺腫瘍内科

小林政司, 松井 薫

神戸市立中央市民病院呼吸器内科

西村尚志

大阪市立総合医療センター臨床腫瘍科

武田晃司

りんくう総合医療センター市立泉佐野病院呼吸器科

植島久雄

近畿大学医学部堺病院

杵浦孝宗, 福岡正博

倉敷中央病院呼吸器内科

吉岡弘鎮

佐賀大学医学部内科

荒金尚子

【目的】高齢者肺腺癌の初回治療におけるゲフィチニブの効果と安全性を評価するため、phase II スタディを計画した。【方法】70歳以上でstage IIIB/IVの化学療法治療歴のない肺腺癌患者で、PSが2以下の症例を対象とした。胸部X線で間質性肺炎を認める症例は除外した。適格患者はゲフィチニブを1日250mg、増悪するまで内服した。プライマリーエンドポイントは奏効率とした。【結果】2004年12月から2005年12月までの30例で検討した。平均年齢78.5歳、16例が女性で、14例が非喫煙者であった。奏効率は23%、平均生存期間は11.9ヶ月、無増悪生存期間は3.2ヶ月であった。治療に関係あると思われる急性心筋梗塞を1例認めたが、その他重篤な副作用は認めなかった。【結語】ゲフィチニブ単剤は化学療法治療歴のない高齢の肺腺癌患者において有効で耐容可能な治療と思われた。

83. 肺放射線治療における MU のアルゴリズム間での検討

福山市民病院放射線科

勝井邦彰, 生口俊浩

中国中央病院放射線科

藤井康志, 水田昭文

岡山大学放射線医学

金澤 右

肺腫瘍への放射線治療線量を肺補正